

日本で育つ 研究者・エンジニアの卵たち

高度な技術・産業に支えられた「知識集約型経済」への移行を目指すマレーシア。
その上で欠かせない工学系高等教育を推進するため、
マレーシアはJICAの協力の下、理工系学生の日本留学を支援している。



(上) 電子工学の講義で日本人教員から電子回路について説明を受けるHELPの学生。大学レベルの専門科目の授業も基本的に日本語で行われる。午前8時に始まる講義が、午後6時までかかることも
(下) 1年目は日本語教室が集中的に行われる(撮影:菅原アラセ)

HELPⅢは、マレーシアで3年、日本で2年、合わせて5年間のプログラムで構成される。最初の3年で段階的に、①日本語、②日本の高校3年生レベルの数学、化学、物理、③日本の大学の1～2年生のカリキュラムに相当する専門科目を学ぶ。その後、晴れて日本の大学の3年生を専攻。2年間の留学で日本の大学の学位が取得できるほか、その間の学費や生活費も支給される。学生の受け入れに協力してきた大学は、国立・私立合わせて56大学に上る。

「これはよく使うベクトル解析の手法なので、しっかりと覚えておいてください」
マレーシアの首都クアラルンプールから南西へ車で約1時間。セランゴール州の州都シャ

「知識集約型経済」を目指して

分野で活躍できる産業人材の育成が不可欠だ。そこでマレーシアが注目したのが、高い科学技術力を持つ日本だった。1980年代以降、「ルック・イースト政策」※の下で推進してきた理工系学生の日本留学。HELPはその支援策として92年に始まり、現在3期目を迎えている。

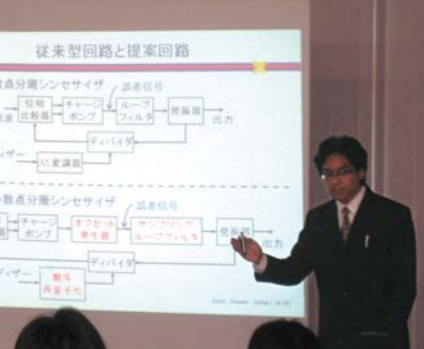
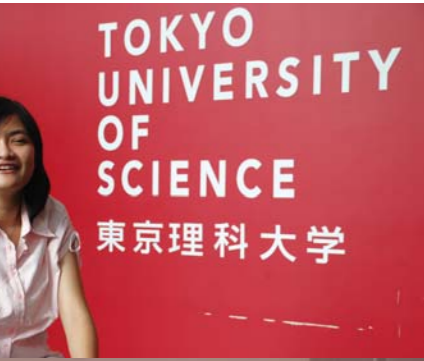
日本の技術力を財産に 国の発展を

「日本の技術力の秘密を知りたい」「エンジニアとして日系企業で働きたい」。さまざまな希望を胸に、海を越え、日本にやってきた学生たち。「来日当初は講義についていくのがやっとでした」と話す東京理科大学工学部2年生のヌール・アシラ・ビンティ・モズリさんも、「今は日本

語にも慣れ、恵まれた研究設備や教授の丁寧な指導のおかげで、充実した学生生活を送っています」と話す。材料工学を専攻している彼女は現在、環境負荷の少ない「生分解性プラスチック」の研究に打ち込む。「将来は母国で研究者として、環境素材の研究開発に携わりたい」と夢を抱く。

また、慶應義塾大学大学院理工学研究科で無線通信技術を学ぶアブル・ハサン・ジョハリさんは、「日本人の勤勉性は、私たちの国にこれから最も必要とされるものだと思います。日本で学んだことを生かし、将来は半導体関連のビジネスを起こしてマレーシアの発展に貢献したい」と流ちょうな日本語で話す。2年半前に来日した彼は、同大学の学士課程で電子回路のデザインを学んだ後、HELPの大学院枠に志望。「より高度な専門知識と技術を身に付けたい」という思いで、さらに意欲的に研究に励んでいる。

HELPが始まって今年で18年。09年度までに日本に留学した学生は861人に上る。卒業生の多くは、製造業、電気通信、IT産業など地元の民間企業に就職し、主に研究者やエンジニ



「日本では充実した学生生活を送っている」と話すヌールさん(上)と、学会で研究発表を行うアブルさん。母国の発展に貢献することはもちろん、日本との永い「懸け橋」としての役割も果たしていく



学生が留学先の大学を検討できるように、マレーシアでは日本の大学関係者による留学説明会も開かれている

※日本と韓国の経済発展の経験を手本とする政策。1981年に、マハティール首相(当時)が提唱した。